

下巻 目次

新時代へ向って——原子力産業の形成	一
軽水炉の建設と長期予測	三
1 はやく新しいエネルギー源を	四
2 二〇〇〇年までの長期予測	七
3 総合エネルギー政策の出發	一〇
4 受注残高一千億円をこえる	一四
5 核燃料加工に外資が進出	一〇
動力炉開發のスタート	一六
1 政策論議の本舞台へ	一七
2 コンセンサスへの努力	三三
国内サイクル論とカスケード論	新型転換炉に消極論
論の内容	中間結

3	ナショナル・プロジェクトの誕生	三六
4	動力炉・核燃料開発事業団の発足	四〇
5	プロジェクト遂行上の問題	四〇
	核燃料政策の前進	四一
1	使用済み燃料政策の流産	四六
2	核燃料政策の基本方針出る	四八
3	濃縮ウラン、プルトニウムの民有化	五〇
	産業共存への努力——立地環境問題	五〇
1	PRよりも安全対策を	五三
2	立地問題のオープンな論議へ	五五
3	野放しの工場排水に不信感	五九
4	共存の原則うち出す——平田委員会報告	六三
5	放射能の監視	六七
	佐世保の異常放射能事件 漁業調査団、欧米へ 福井、福島で放射能監視協定	六七
6	大型サイトの増加	六九
	原子力文化振興財団の発足	六九
	再処理とプルトニウム	六九
1	再処理工場設置の難航	六九
	東海炉の再処理方針 自主開発から技術導入へ 設計作業のおくれ 茨城県の反対運動 情勢の好転→うけ入れへ 原子力安全研究協会の活動 建設資金問題	六九
2	プルトニウム燃料の開発	一一三
	燃料研究施設の完成 サーマル利用研究の進展 高速炉用燃料の研究開発	一一三
3	使用済み燃料の輸送	一一九
	ウラン資源の確保	一二五
1	菅さんの呼びかけ	一二五
2	海外開発の体制をめぐって	一二三
	長期購入か開発輸入か 開発の主役は誰 電気事業者が「主役」を	一二三
3	カーマギー、デニソンとの共同探鉱	一二七

4 ニジエールで共同探鉱へ……………一四〇

ウラン資源開発委員会を設置 フランス・ニジエールへ調査団
海外ウラン資源開発(株)の設立

濃縮ウランの調達……………一五〇

1 濃縮研究の経緯……………一五〇

2 濃縮ウランをめぐる国際情勢……………一五三

3 研究開発の足ぶみ……………一五八

4 アメリカの民営移管問題……………一五六

5 研究開発前進のきざし……………一六〇

6 昭和六十年までに年産五千トン単位を……………一六四

原子炉多目的利用の気運……………一六九

1 発展途上国の水不足……………一六九

2 わが国にも多目的利用の気運……………一七三

3 原子力製鉄の緊急性……………一七五

4 コンビナート・モデルの検討……………一七七

5 開発の長期見とおし……………一八〇

核拡散防止条約の調印……………一八三

1 米ソの核軍備競争……………一八三

2 核拡散防止をめぐる米ソの対立……………一八六

3 米ソ共同草案の提出……………一九〇

4 非核保有国の追及……………一九四

5 わが国も賛成投票へ……………一九六

6 わが国の調印——条約の成立……………一九九

7 保障措置文書の作成……………二〇二

8 原電・敦賀で抜打ち査察……………二〇五

地上の太陽づくり——核融合……………二〇七

1 はずれたバーバ予言……………二〇七

2 A計画、B計画論争……………二一一

3 プラズマ研究所の設立……………二一五

4 主流はトコマク型……………二一八

展望——これからの原子力……………二二三

1 情勢の変化と新長期予測……………三三

石油問題の波紋 環境世論の高まり 自主開発の前進 原子

力産業の長期予測

2 パネル——「原子力産業の将来」……………三三

サイトと環境 廃棄物をへらすこと ウラン濃縮とリスクの負

担 エンジニアリング会社を使え 今後三十年の時間表